

特集 埼玉に根を張る

ペルーを思い、共に深谷に暮らす

埼玉ペルー協会 代表 イザベル ロハスさん、大貫 カティアさん、ムラカミ ファンさん

埼玉に暮らす外国出身者の中には、地域に根を張り、積極的に地域と関わり生活している方が多くいらっしゃいます。7年前の東日本大震災の際に現地へ支援物資を寄贈したことをきっかけに、現在は地域で様々なセミナーや勉強会を実施している、埼玉で暮らすペルー人の自助組織があります。埼玉に暮らす同じ出身国の方達のコミュニティから発展し、地域で共に暮らしていくために様々な課題に取り組まれている「埼玉ペルー協会」の皆さんに取り組みや思いについて伺いました。

「埼玉ペルー協会」ができたきっかけは？

「埼玉ペルー協会」は2011年5月25日に設立されました。東日本大震災の際にペルー大使館からきた一本の電話が始まりでした。一週間後に埼玉県内のペルー人を集めてほしい、そこで現在の状況や必要な支援や物資を知りたいというものでした。そこで、県内在住のペルー人に参加を呼びかけ、当日は県内のペルー人が約70人集まり、現状確認、そして、原発事故による放射能汚染も危惧されていた時期だったため、ペルーへの帰国の意志確認や意見交換が行われました。埼玉に住むペルー人達はみんな怪我もなく、日本に暮らし続けたいという声ばかりでした。もともと、深谷には多くのペルー人が暮らしていたのでコミュニティは形成されていましたが、組織として活動するということはありませんでした。しかし、この会合を機に、大使から、ペルー人の団体を埼玉でも作ってほしい、大使館としても援助するのでがんばってほしいという要請を受け、設立することになりました。その後、資金を集めるため、深谷でペルーイベントを開きました。その収益金を元に団体を立ち上げ、日本で暮らす中で直面する様々な問題について話し合い、研修の機会を設けて解決へ向け活動してきました。



立ち上げのためのイベントの様子

東日本大震災での取り組み

大震災前からカトリック教会を通じてつながっていた4人が何かできることはないかと思い、活動を始めました。まず、ペルー料理の販売やサッカーイベントを開き、フットサル施設などに募金箱を置いてもらい資金を集め、ペルー人の知人達に呼びかけ、各家庭にあるインスタント食品やオムツなどの衛生用品、ラップやゴミ袋などの日用品を集めました。赤ちゃんの衣類、靴下や下着は新品を調達しました。しかし、物資の受入れ先がわからず、どうやって送るか、困ってしまいました。そんなとき、兵庫県在住で南米からの移住者向けフリーペーパー「メルカド ラティーン」を発行するマリアナ・モリタさんが、トラックで支援物資を運び計画をしていることを知り、モリタさんに被災地の方の連絡先を教えてもらい、現地で不足しているものを直接聞き、準備を進めました。その時集まった物資は家のリビングいっぱいになりました。これらを選別し、さらに衣類は洗濯し、きれいに畳み圧縮袋に入れて、パッキングしました。荷詰め作業は丸三日かかりました。幸い、地震発生から3週間後に宅配便が復旧したので、それを使い被災地へ発送することにしました。支援物資はかなりの量だったので、集荷に来た方には驚かれましたが、メンバーと一緒に段ボールを運び入れました。1週間後、荷物は避難場所に無事届き、「たくさんの物資を本当にありがとう」とお礼の電話が



活動を立ち上げた4人のメンバー



子ども達と一緒に募金活動

来ました。それを聞き、とてもうれしく、みんなで泣いて喜びました。4人で始めた活動ですが、徐々に人数が増え最後は15人になりました。こちらからお願いしたわけではありませんが、みんな日本で幸せに暮らしていることにお返しをしたい気持ち、何か手助けしたい気持ちで手伝いを買って出してくれました。普段、「支援が必要な立場」と考えられがちな外国人の私たちですが、この時、微力ながら「支援する立場」になったことは意識の上で大きな事だったと感じています。

このとき、やりとりをした被災地の方が地震発生から3か月後に支援のお礼をしに深谷に来てくれました。その時乗って来られた車はほこりや汚れがひどく、被災地の大変な状況がよくわかりました。まだ多くの道が復旧していない中、わざわざお礼に来てくれたことが本当にうれしく、ペルーのバーベキューを振る舞いました。その汚れた車のボディに指で「埼玉、どうもありがとう」と書いてあって、それにまた感動しました。

地域で課題に取り組む

協会を設立し、初め何をしたらいいか悩みました。東日本大震災後だったこともあり、2011年には「防災セミナー」を開催しました。深谷消防と深谷市役所から講師を招き、地震の怖さ、避難場所の確認、電話がつかないときの対応などについて、学びました。また、2012年7月には入管制度が大きく変わり、多くの人が不安に感じていました。そこで、東京入管に依頼し、セミナーを開催しました。その時は、南米のスペイン語圏の人々がたくさん参加しました。その後も「交通安全セミナー」、「いじめセミナー」とみんなで学ぶ講座を企画しました。昨年は2020年の東京オリンピックに向けて、ボランティアとして何ができるかについて話し合い、意見交換をしました。愛知、栃木、群馬、静岡など他県からの参加もあり、70名が集まりました。



リビングいっぱいの支援物資

埼玉で暮らし始めた頃

ペルーの日系人は1986年頃に第1陣が来日しました。その当時、深谷には東芝、日立、三菱などの大きな工場があり、たくさんのペルー人が働くようになりました。その多くは日本語が全くできませんでした。10年くらい経ち、生活も安定してくると、家族を日本へ呼び寄せることが増えました。ペルー人の子供達は日本語ができないまま日本の教育機関へ入ることになりました。当時、今よりも外国出身の人、文化、言葉などが身近にない状況で、学校で孤立し、つらい思いをする子供が多くいました。今は外国出身の子供へのサポートが手厚くなってきていて、感謝しています。もちろん、大人も日本語ができないことで苦労しました。初めはカタカナ読みで呼ばれる自分の名前が聞き取れず、呼ばれても気付かないことがありました。苦労や失敗を繰り返して、少しずつ覚えていき、今では言葉で困ることはなくなりました。



イザベルさん(左側)と大貫さん(右側)

今後、取り組んでいきたいことは？

今年は、子育て中のお母さん達のSNSグループを作ろうと思っています。協会側からの情報発信だけでなく、「いじめ」問題も含め、学校生活で悩んでいること、わからないことなどをアップしてもらい、情報共有しながら孤立し悩む親子を減らしたいと考えています。子育て世代向けのイベントや、日本文化体験や観光も一緒に楽しみたいと思っています。外国人が日本で遊ぶところとして思い浮かぶのはディズニーランドとユニバーサル・スタジオ・ジャパンくらい。もっと、日本の良いところをみんなで共有していきたいです。また、9月には2回目の「防災セミナー」を7年ぶりに企画しています。今回は地震だけでなく、消火器の使い方や火災時の対応、救命救急講習などを考えています。子供達は学校で実施される避難訓練や交通安全講習などで様々なことを学んでいます。それらのことは大人達も知っておくべきです。また、スペイン語の防災ガイドの作成や社会保険と年金についてのセミナーの実施も予定しています。

私たちの協会は現在12人のメンバーと6人のサポートスタッフで運営しています。仲間をもっと増やしたいという気持ちもありますが、今まで大事にしてきたボランティア精神を基本としているので、まずはサポーターとして活動してもらい、ボランティアでがんばれることを確認してからメンバーになってもらっています。それぞれの得意なことを活かし、メンバーみんなでボランティアの気持ちを大切に今後も活動していきたいと思っています。



ムラカミさん